

情報士官たちの静かな戦い

諜報活動や情報士官にまつわる物語といえば、ほとんどが小説の中の出来事。『ライオンと蜘蛛の巣』（幻冬舎）も、まるで短編小説集のような印象をもつが、ここに収められた29の物語は、外交ジャーナリストの手嶋龍一さん『写真』が、すべて直接見聞きしたノンフィクションである。

フォークランドの危機に警鐘をならす緊急電を情報当局に黙殺された英国の元情報士官「アラン・セーターの人」。寒い国から来たスパイたちの名前を庭にあるバラの名札に刻む元英国情報局員の老婦人を描いた「ミッシェルの墓銘」。これら風変わりな英国人情報戦士たちの話のほか、ベストセラーとなった手嶋さんのスパイ小説『ウルトラ・ダラー』の主人公らしき人物

ライオンと蜘蛛の巣



も登場する。

手嶋さんは「旅先でメモや写真を取ることは、ほとんどない。自分の中に沈殿していく、記憶の世界を大切に書いていく」という。これが物語に絶妙なボカシを入れる効果をあげているのだろう。登場人物や地名

はすべて実在し、道案内のイラストまで入っていて、一見旅行記のようでもある。しかし、諜報・防諜活動や安全保障など、決しておろそかにしてはならない問題に真摯に向き合っていることが分かる。

「あの冷たい戦争で戦った情

報士官たちの姿を、書き記して後世に伝えることは、ジャーナリストとしての自らの責務。機密を深く胸に秘めたまま、この世を去っていく彼らの姿を、冷戦後を生きる人々に伝えておきたい」

本書は手に汗握る『ウルトラ・ダラー』と異なり、静謐で知的で、そしてオシャレな小説風のタッチで描かれている。「深夜に思わず、旅に出かけたくなったという人に、気楽にブランデーでも傾けるように読んでもらえたら」と考えて書いた。小説のようだという評価が得られれば本望という。

そして「前作とタッチを変えたように、これからも読者の期待をい意味で裏切りながら書きついでいきたい。次はスパイとはまったく趣向の違うものに挑むかもしれないよ」と笑う手嶋さん。次の作品では、どんな世界を見せてくれるのだろうか。（猪山卓）